


 書評

野村総一郎，樋口輝彦 編

標準精神医学 (第3版)

高橋清久

精神医学の“標準”を示す教科書

本書は他の類書に見ない大きな特徴がある。まず第一に、簡潔でわかりやすい表現である。教科書というと重々しい表現で学生が読むには抵抗がある表現をよく見かけるが、本書に限ってはそのようなことがない。第二に精神医学の歴史の記述などに見られるが、物語性があり、読者をあきさせない面白さがある。第三に内容に偏りが無い。教科書であるから内容が偏っているのは困るのであるが、本書は類書に比べて生物—心理—社会という精神医学の重要な側面がバランスよく取り入れられている。第四に内容が新しい。今、精神医学は多くの新しい知見が蓄積されており、国の施策も大きく変わり、精神医療・福祉の発展が著しい。司法精神医学の新たなスタートである医療観察法も最近施行された。このような新しい内容も簡潔に盛り込まれている。

学習に便利のように、各章に「学習目標」「キーワード」「重要事項のまとめ」を入れていることも特徴的である。それに加えて、「エビデンス」という囲み記事を入れており、精神科領域のEBMを紹介している。これによって読者は精神医学においてもEBMが重要視されていることを知り、認識を新たにすることであ

ろう。さらに、医学部を卒業して何科に進んでも役に立つようにと、巻末には「プライマリケアのための精神医学」がある。編者のサービス精神がここに極まった感がある。

以上のような特徴に加えて、もっとも特徴的なことは本書が精神医学の標準を示していることだ。2001年の第2版出版の際に、編者が交代し、執筆者も一変した。その際の序文に、編者の「本書は学生向けの教科書であるが、同時に『精神医学の標準とは何か』を示そうとしたものである」という意欲的な言葉がある。読後感として、その言葉通りに現在の精神医学の標準的なレベルというものが示されているという印象を持った。

このように標準的な精神医学が、わかりやすく、簡潔で、バランスよくまとめられ読者に提供されたのは、いつにその編者・執筆者の尽力によるものと思われる。精神医学の幅広い分野の中で、各分野のもっとも相応しい研究者が編集し、執筆している。そして1人ひとりの執筆者の意欲が伝ってくる。そこに本書の特徴があると思われる。

(国立精神・神経センター名誉総長)

● B5 512頁 2005 定価6,825円(本体6,500円+税) 医学書院